

## 「キリストの奥義」エペソ3章1-7節

先週はイエス・キリストによって神との平和、神との和解が与えられ、イスラエル人と異邦人との間にあった隔ての壁、敵意がキリストの十字架によって滅ぼされ、すべての人々に救いがもたらされたことを学びました。そして今日の3章1節から7節では、パウロがこのイエス・キリストのすばらしい救いを異邦人にもたらすために「異邦人伝道の使徒」として召され、「福音に仕える者」になったことが語られています。そしてパウロは、この3章の冒頭で、自分の使命を「こういうわけで、あなたがた異邦人のために、私パウロはキリスト・イエスの囚人となっています。」と語っているのです。

それでは、パウロはどのようにしてキリストによって捕えられ、キリストの囚人となったのでしょうか。このパウロはかつては熱心なユダヤ教徒でした。ユダヤ名をサウロと言い、ユダヤ教の中でも最も熱心なパリサイ派というグループに属し、ガマリエルという有名な律法学者の門下生として学び、律法に関しては他の者に比べて抜きんでてすぐれていたと自分で語っています。そのためか、ユダヤ教とは異なるキリスト教の存在が許すことができず、教会弾圧の先頭に立ち、キリスト者を迫害し、男であれ、女であれ容赦なく捕らえて牢に投げ入れていました。そしてパウロの迫害は国内ばかりでなく、国外にも拡張され、大祭司からクリスチャン迫害を許可する手紙までもらい、はるかシリアの首都ダマスコにまで迫害の手を伸ばそうとしました。ところがそのダマスコの近くまで来た時、突然、天からの光がパウロのまわりを照らし、地に倒れて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」とのイエスの声を聞いたのでした。ついに、この教会の迫害者サウロが迫害していた当のイエス・キリストと出会う時がやってきたのでした。パウロが「主よ、あなたはどなたですか。」と言うと「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」とのイエスの声を聞いたのでした。その後、目が見えなくなったパウロはダマスコの町に連れて行かれ、そこでイエスから遣わされたアナニアというキリスト者によって祈られますと目が再び見えるようになりました。そこで、アナニアより、「パウロがイエスの名を異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、イエスの選びの器となる。」(使徒9:15)ことを告げられたのでした。それは、エペソ3章11節に記されてあるように「神の永遠のご計画」によることでありました。このダマスコ途上で復活の主イエス・キリストに出会い、異邦人伝道の使命を与えられたことはまさにパウロの救いの原点でありました。パウロは過去の経歴から言えば最もユダヤ主義的な信仰を持っていました。しかしだからこそ、そのユダヤ教律法主義の信仰の虚しさ、そこに救いがないということもわかっていました。しかしそれはパウロの今までの学識や信仰理解、救いの理解がキリストによって180度変えられなければ決してわからないことでもありました。パウロはその後アラビアでの3年間を過ごし、今まで彼が学んできたユダヤ教の救いや律法解釈とキリストによってもたらされた新しい救いとの違い、メシヤに対する理解の違いなども根本から学び直したのではないかと思います。それは、パウロがかつて徹底したパリサイ派の律法学者であり、その虚しさを知っていたからこそ理解できることでもありました。そのような意味ではパウロという人物はまさに「神の選びの器」でありました。

しかしパウロが「選びの器」と呼ばれたのはそのようなユダヤ教の旧約聖書に関する知識の深さだけではありませんでした。パウロは現在のトルコにあたる小アジアのタルソという異邦人の町で育った外国育ちのユダヤ人でありました。パウロはこのタルソの町でギリシャ宗教やギリシャ哲学を学び、異邦人の生活や習慣も熟知していました。もちろん、ヘブル語だけでなくギリシャ語やラテン語も自由に話せる当時の一流の国際人でもありました。さらに

は彼の家は裕福な家で、当時ほんの一部の人しか持つことができないローマ市民権を生まれながら持っていました。そのためパウロは伝道旅行においてこのローマ市民権を主張し、特別なローマ法の保護を受けることができたのでした。そのような意味において、パウロは異邦人世界に福音を伝える上でまさに選びの器であったと言えます。神さまはそういう意味では、クリスチャンになる前の私たちの様々な人生経験や宗教、知識、訓練して得た技能などすべてをクリスチャンになってからも用いて下さると言えます。パウロはこのような律法主義の囚人から解放されて、キリスト・イエスの囚人へと変えられたのであります。

そして、パウロがこのキリスト・イエスの囚人となるということは、もはや自分の思いに従って生きるのではなく、イエス・キリストの思い、キリストの使命に生きる者になったということでもあります。しかし私たちがキリストの御心、キリストの使命に生きるためには、キリストの御心や救いがどのようなものであるかを正しく知ることが必要です。パウロはそのことを知っていました。だからこそパウロは自分にキリストの奥義が啓示され、知らされ、それを正しく理解していたと言うのであります。(3-5節) 私たちはイエス・キリストの救いがどのようなものであるかを正しく知らなければそれを人々に伝えることができません。それではパウロがここで語っている「キリストの奥義」とは何を指しているのでしょうか。それは今まで見てきましたように、また3章6節に記されていますように、「イエス・キリストの福音によって、異邦人もユダヤ人と同じように共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になる。」ということです。つまり、イエス・キリストによる救いは、すべての世界中の人々のためであるということです。この新約の時代では、異邦人たちがイスラエルと全く同じように救われることが明らかにされたのであります。イスラエル人にとって異邦人が神を信じ、神の救いにあずかるなんて信じられないことであります。そのような者たちがともに同じキリストのからだに連なるのです。そしてそれが教会だと言うのです。教会はそのように敵対する者すら、一つにする力があると言うのです。それはキリストのからだに連なるのですから、キリストを同じようにかしらとした者が一つになれるのです。従ってそれはどこまでもキリストを信じる信仰によるのです。そして、この人類の歴史を一変させた革命は「イエス・キリストによって与えられた福音によって」もたらされたのでした。あのかたくなに福音に敵対してキリスト教徒を迫害していたパウロがキリスト者に変えられ、異邦人伝道の使徒に変えられたのであります。これはまさに神の力の働きによることです。福音とはグッドニュースです。それはイスラエルに与えられた神の恵みの賜物、神の救いを今やユダヤ人だけでなく、あらゆる人が受け継ぐことができるようになったという知らせです。キリストの十字架、復活、昇天によって、イエス・キリストを信じる者は尽きることのない神の豊かな富を受け継ぐ者となったのです。

そしてパウロはローマの獄中であって、このイエス・キリストによって与えられた福音を異邦人に宣べ伝える務めが神によって与えられていることを喜び、誇りとしているのです。パウロが捕えられていることによってエペソやアジアの他の教会の人々が意気消沈しないように手紙で彼らを励ましているのです。それにしても、ここで「キリスト・イエスの囚人となった」と言い切るパウロの何という強い自負心でありましょうか。事実、パウロにとってキリストはすべてのすべてなのであり、生きることも死ぬこともキリストなのです。

教会の迫害者であったサウロを異邦人伝道の使徒パウロに変えたイエス・キリストは今も生きて働いておられます。そして主イエスは今もパウロと同じように「福音に仕える者」を求めておられるのです。私たちはパウロの信仰にならい、キリストによって救われ、キリストのしもべとされていることを喜び、誇りとして、その大切な使命である「福音に仕える者」と共になりたいものです。